

14 歳ホステスから年商 10 億円の IT 社長へ

久保田真紀子 PHP 研究所

両親の離婚、極貧生活、いじめ、非行 14 歳で家を出され銀座歌舞伎町でホステスして NO1 に、いろんな男の愛人になっていたことも、25 歳の時エリートサラリーマンと結婚、平凡でも幸せな結婚を夢見ていたが私を待ち受けていたのは壮絶な DV 僅か 10 ヶ月で心身ともにぼろぼろとなって私の未来は終わったと思った。でも一生懸命探し続けて救いの手が現れた。今は立ち直って IT 企業を創業しシングルマザー等沢山雇用・・・人生は何度だってやり直せる、たった今、この瞬間、前を向こうと思ったこの時が貴方の人生を変える第一歩になっている、そのことを私は信じて疑わない。

{ 第 1 章 虐待、貧困、いじめ、そして………… }

- * 幼いころ受けた母親からの虐待～母に、お前は殺人以外全部したねと云われたが、「でも薬と売春はしていない私はそこまで落ちていないから」それが私の矜持だった。母の虐待は成長が遅い妹に集中、うらやましように私達のハンバーグを見る妹に姉が見かねてそっと渡すと、母の怒号が飛び妹のあごに蹴りが直撃、床に転がっても蹴り続けた、妹は複雑骨折で 2 度も入院したが当時は不問に付された。母だって知らない土地で 3 人の幼子を育てパニックになったのも無理はない私は同情、私はどんなに虐待されても、虐待する姿を見ても私にとって母は“すべて”で大好きだった。
- * 両親の離婚、北海道から北千住へ～母の虐待はある日、突然、終わりを告げた。父と母が離婚。母に聞かれて妹は迷わずパパについていくと、私は半ば安心した。北千住は下町で母の生まれ故郷の人達は温かかったが貧乏暮らしが始まった。
- * とんでもない超極貧生活～住まいはボロボロのアパート生活保護を受けてもパチンコに使い、パートに出ても喧嘩して辞め、忙しすぎると職場を変え最後にタクシー会社の清掃員に落ち着いた。母の怠惰で姉と私は最初 3 ヶ月間学校に行けなかった。2 学期から初めての教室で自己紹介した時、いきなり先生から往復ビンタを食った～「そんな汚い言葉を使ってははいけません」と、それから田舎者のバカというレッテルを張られいじめが始まった。一番いやだったのは「貧乏、カギツ子、ぼろ屋」「あいつんち、風呂も電話もないんだぜ」いじめっ子が帰り道で後をつけてきて石をぶつけた。家賃を払えず追い出され転校した先は超マンモス校で、最初はいじめられたが姉と姉の友人達に助けられた。私はすかさず反撃、一番強そうな男の子の胸ぐらを掴んで投げ倒した「やべえ」気が付いたら私はいじめっ子に変わっていた、弱い子には手を出さないが態度の大きいいじめっ子は懲らしめた。私は姉から云われて自分に誓った「私は中学で頑張る、大学まで行って、立派な社会人になる、そして母に楽をさせるんだ」

{ 第2章 14歳、ホステスになる }

- * 暴れに暴れた中学時代～中学の内覧会のトイレでド派手な女の子が目につき注意してやろうと「ちょっと」と乱暴に肩を掴むと、その子が振り向いた、目と目が遭った瞬間電流の様なものが私達の間を走り一瞬にして理解し合えるようになり生涯の友 A との出会いだった。私は A やその仲間の不良達との付き合いにのめり込んでいった私と A は殆ど学校に行かず 1 年間で恐らく 8 割は警察の厄介になった。弱そうに見え教師になって 2 年目の英語の女性教師に暴力を振るい給食時間にトイレの水を先生の給食にドバーツとかけた、けれど先生はめげず 1 年間担任、次の年教師辞職。私は今でも後悔している、若い女性教師の夢と未来を奪ってしまったことを。その時は今が楽しければいい、この惨めな現実を忘れたい貧乏から逃れたいの一心で非行「A」と一緒に 1 年間ぐれた毎日少年院に行く寸前での経験は私の背筋を凍らせた。
- * 14 歳で家を出されホステスになる～中学 2 年生で母からお願いだからお姉ちゃんの為に家を出て半径 30km 以内に近寄らないでと土下座迄して懇願され私が悪ガキを殴りカッターで傷つけ母が平謝りしたが仕返しは姉に向かったのだ。姉は優等生で、その頃からアメリカに渡り英語の勉強をしたいとバイトでお金を貯めていた、都立高校受験に失敗して本当にアラスカに行き英語はぺらぺらに、後に周囲の反対を押し切り宣教師と結婚、米国に渡り懸命に勉強し外科医になった。私とは月とスッポンの差だ住むところが無くなり、新しい彼は私の為に家賃百万円の家を借りてくれ 14 歳の私に贅沢の限りをさせてくれ夢の様な同棲生活だった。ある時、彼とプリティ・ウーマンの映画を見に行き貧しい娼婦が大金持ちに拾われて一人前のレディに成長する恋愛物語で私の妄想が広がり、横に座る彼への気持ちが一気にさめ、あっさり彼をふった。
- * 夜はホステス、昼間は時々中学生～花子 19 歳の新人です、よろしくお願ひします。～本当は 14 歳の私、お客さんの会話は政治、経済他色々私にはチンプンカンプンにっこり笑って、聞いていた、気が付くと人気ホステスになっていた。客の取り合いで、リンチされそうになったが私の方が強く無敵になった。お客が何を求めているか見極め、ニーズを探り使い分け、分からないまでも新聞を読み電子辞書で漢字を覚えた。次々に指名がかかり 1 晩で数百万円も使うお客さんを何人もゲット、バブル景気最中
- * 銀座流作法でナンバーワンへ～卒業してからも銀座の高級クラブを渡り歩き、いい顧客をつかん NO1 になったのは 17 歳の時だった。私は有頂天だったがバブル崩壊、ツケで飲んでた常連客が逃げ、私が肩代わりして払うのが掟だった。
- * ナンバーワンの重圧～毎週初めが肝心で全力投球息つく暇もなくしてお盆や年末は恐怖だった 21～2 歳過ぎの頃から私の心は壊れ始めた、心療内科に通い薬が切れると地獄だった。

{ 第3章 夢見た結婚。そして破綻 }

* 手に入れたかったのは、普通の幸せ、結婚、そして命からがらの離婚～ある会社の支社長で、落ち着いた紳士、一目見てびびびっと来た、私はこの人と結婚する運命だと、私は久しぶりに母に電話、それから半年後に結婚、9歳年上の男性、ついに私を幸せにしてくれる男性が現れたと思った。籍を入れるまではプラトニックを貫き本気で私を愛してくれると思った。しかし彼には奥さんがいて離婚調停中で正式に結婚できたのは数ヶ月後25歳の時、彼は結婚する迄はとても穏やかで紳士的で優しくかったでも結婚したら途端に人が変わりゾットとする様な据わった目で私を見つめ説教をする。私は少しずつ精神を病んでいった。やがて彼から離婚が切り出され命の限界だった。ある時、前にバイトしていた不動産屋の上司が家にきて、骸骨の様になって横たわっている私を見てのけぞるほど驚いた「そんな体にするなんて旦那さんとは言えない」それでも私は彼と離婚したくなかった。暫くして彼が家に戻りやせ衰えた私を見てさすがにまずいと「ご飯食べに行こう」と誘いだし、私は最後の力を振り絞って行った。料理はあれこれ出されたが喉を通らない、それでも必死に食べていたらゾットとする視線を頬に感じた。彼がまるでゴミでも見るような目で私を見つめていた、背筋がゾットとして「分かりました離婚を受け入れます」途端に彼の目つきが変わり店を出た時に交通標識を持ち上げ「おーー」と叫びながら向かってきた……その時居酒屋のご主人が店から飛び出し彼に体当たりしてくれた。

{ 第4章 転機—金融業、そしてITの世界へ }

- * ゼロからの出発～母は優しく受け入れてくれたが生活保護を受け、相変わらずパチンコにつき込み借金もしていた。負けて金貸してと、実はある人が間に入って彼から慰謝料を350万円取ってくれ母はそれをあてにしていた。母が外出すると心配で頼れるのは母だけだった。10ヶ月の結婚生活で私の精神はボロボロになっていた。
- * 姉を頼ってアメリカへ～2001年11月マキちゃんアメリカに来ないと姉から電話があり、シアトルへ、姉は19歳年上の宣教師と結婚、アメリカで外科医を目指し勉強中、2人の子供に恵まれていた。
- * 姉の背中が教えてくれたこと～姉は朝の5時ぐらいに家を出て翌日午前1時や2時というハードな生活、姉の目が赤かった、台所に入ってぼそぼそと姉の声「こんなことで負けたら、命がいくつあっても足りない」姉の背中がかすかにふるえていた。勤務は過酷でもいい外科医になろうと努力を怠らない命を守る使命感と重圧、患者さんの死と向き合う厳しい現実、そして人種差別、姉はそれらを全てはねのけ負けるものかと呪文のように自分に言い聞かせながら、でも早朝にシャキッとして病院に行く。又家庭サービスも怠らなかった。姉は1本の映画に感動して医者になつた、私は、姉の背中に感動して、前向きに生きると誓った。

{ 第5章 何も分からないIT業界へ飛び込む }

* その仕事がしたい～「花子、寿司食いに行かないか」ある大手ソフトウェアグループ会社の社長で気の合ういいお客さんだった。「第三者検証って知ってるかい」と、でも知らないし興味もない、雲をつかむような話でお寿司だけ食べて別れた。

それから3ヶ月に一度寿司に行こうと誘われ、師匠は第三者の立場で検証する人間がいないので、ソフトウェアの開発者が検証しても意味がないと。製品を使うのは一般の人で普通の人目で検証しなくてはならないと。この仕事に向いているのは女性なんだ！これから凄い市場になるぞ、ロシアを買える位の規模になるかもしれない。「私にできる？」～できるから言ってるんだ！～「やってみようかな」よし決まった！2002年11月1日～肩書はタダの営業担当、中卒で27歳の秋だった。但し、条件が一つ付き3ヶ月で新規の仕事を取れなかったら首だ！

* 分からない IT 用語を猛勉強～役員会議に出ると言われ店で見えていた彼とは全く別人“できる男”だった、話の内容は全然分からず退屈して人間観察をした。会議の後、歓迎会をしてくれ「彼女は学校に行っていないが頭はいいんだ」師匠が一人の男を指指し、あいつのことはどうだった？私は素直に「ごちゃごちゃ云ってたけど、最終的に結論のなかった方」みんなどーっと笑う。私は猛勉強を始めた。読むだけではすぐに忘れてしまう、分からない言葉だらけで一つひとつ調べて紙に書き覚えた。

* 営業成果ゼロのまま絶体絶命～検証の現場から営業の最前線に復帰、先ずはITを導入している大企業から訪問、いくつもトラブルを起こし、師匠の社長室に駆け込んでも「お前が起こしたトラブルだろう、お前が解決しろ」何度も何度もトラブル先に頭を下げ、弱気になり追い込まれて行った。相変わらず成果はゼロだった、残り1ヶ月

* 困っている人がいたら助けなくてどうする？～ある日、師匠がきて「行くぞ久保田」大手電機グループで2～30億円かけて作ったシステムがうまく動かないので力になって欲しいと。やり取りをメモ、話が済むと担当は彼女ですと。私は無理・無理と心の中で叫んでいた。社内の技術グループに相談してもやめとけと。誰も助けしてくれない。とうとうIBMのシステムに詳しい会社に辿り着き社長始め技術者の前で説明、分からない質問で上司の部長に電話、先方の技術者と部長が話し・そのあと私に代り部長がああメモを見せたのか！馬鹿野郎あれは社外秘だ！結局その会社で手に負えず、その会社の技術者が清さんという神様みたいなカリスマエンジニアがいてその人なら直せるかもしれないと紹介された。数日後に清さんから電話があり「ねえちゃんさあ、土日ではよければ会わないか」ハイ分かりました！社内の技術者は及び腰だったが埼玉の山奥に清さんを訪ねた、驚いたのはその恰好、金のネックレスにでかいオニキスの指輪、シャネルの香水の匂いぶんぶん。シャツも背広も何処から見てもチンピラだ。そんな男が開口一番、大体のことは聞いている俺には直せるよ。1ヶ月後見事に修復しかも550万円の大型受注。問題解決した清さんにどうやったか聞いたら「機械同士が日本語とフランス語で話し言葉が通じていなかったのがフランス語に統一した」～プロジェクトの成功をきっかけに私の営業方針は「私の心を見て下さい、 P 4

私は貴方の為に尽くします」お客さんが困っていたら全力で解決策を探す。お客さんの気持ちになりきる事が大切だ、お客さんに、いかに満足してもらうかが勝負所だ。

- * IT も水商売も仕事の本質は同じ～売り上げゼロが嘘のように仕事をドンドンゲットした師匠から「お前の自由にやれ、蒔いた種は自分で刈り取れ」一度だけ「俺は会社を壊したかったお前ならできると思った」と。だから内に来ないかと口説いていたのだ。

{ 第6章 28歳、起業 }

- * 突然の「起業」命令～師匠の会社に入って3ヶ月漸く手ごたえを感じITの世界で生きていくぞ！と自信と決意、そんなある日、師匠に呼ばれ「お前の籍を我が社から抜いて、俺の仲間の会社に移した、3ヶ月で自分の会社をつくるんだ」何、なに？師匠の会社から毎月60万円の仕事と技術者2人つけその人件費も出す、その体制で新しい事業を起こせ。事業計画書を書いて持ってこい。何度書き直してもOKが出ない「夢を語れ、10年先を見ろ」結局見切り発車。～師匠の千本ノックでは展望、ビジョン、夢を徹底して考え抜かなければならないと。
- * ご縁が繋がり会社設立へ～私には心の支えがあった師匠たちが強調の第三者検証の必要性だった。子供からお年寄りまでソフトを使う時代になったから、第三者による徹底的な検証が必要になってくる。1つの開発で6割は検証に費用が必要と云われ、2010年には1兆円産業になる見込み、私は会社を作る事に全力投球した。2003年7月1日にヴェスが誕生、私は28歳2ヶ月で社長になった。
- * 女性にも活躍の場をつくりたい～大川功は大阪生まれ肺結核等で長く闘病タクシー会社を経営し、40歳過ぎてからコンピューターの会社「CSK」を作りベンチャーの父と呼ばれ、その大川さんに鍛えられたのが師匠で夢は「第三者検証を女性の手で！」師匠は私に夢の実現を託したのだった「IT企業を退職した女性が集まるぞ」と珍しく師匠は太鼓判を押してくれた。ハローワークで募集したが応募はなかった。よく分からない会社がよく分からない仕事での募集は無理な話だった。不良仲間の知り合いにニュースレターが書ける人がいて内の事を書いてもらい、女性の力で運営、手に職のない主婦を雇用、パソコン2級も取れると広報したら経済新聞が取り上げてくれ一度に100人位も来社して対応にでんてこ舞い「レディース・テスター」が誕生
- * 第三者検証という仕事～テスター達の殆どはIT知識がゼロからスタートだ。そこで私は誰が読んでも分かる研修用の資料を作った。必要最低限度のコンピューターの用語30ほど、どんな製品を検証するか、テストの具体例、もしテストしなかったら①説明書通りに操作しても動かない②操作が複雑で使いづらい③あるボタンを押したら動かなくなった④大事なデータが無くなってしまった。私は仕事の意義を強調。結婚してズーと専業主婦、ご主人が亡くなり中学生と小学生の子供を抱えパソコンも出来ない人が応募7週間の研修。清さんが講師チンピラファッションで現れ彼女たちを笑わせてくれた、彼女は入社後更年期障害で体調を崩し

退社を、と云ってきたが3ヶ月休んで復帰すればいいと～彼女は3ヶ月後に復職。

* 何事もないことが最高の喜び～第三者検証の仕事のやりがいは非常に大きい。

自動車リコール隠しでは製品の不具合で死亡事故だって起きる企業の信用問題。

テスターは店頭で並ぶ製品を見て「この子はこんな名前を付けられ発売されたのね、良く育ったわね」関わった製品を我が子の様に思う。第三者検証の会社は今百社位

{ 第7章 社長として生きる }

* 社長らしさとは何？～生前の松下幸之助さんがテレビで「うちの会社はたまたま電化製品を作っていますが本当は人間を育てています、会社の使命は人を育てる事」気が付いたら、テレビの松下さんに向かい正座していた。涙がとめどなく流れてきた。

私が社長らしくなるのではなく、社員が生活に困らないよう会社を成長させ人を育てる。

* いきなりの経営危機～社長になって6年目2008年9月海外出張から帰ってきた師匠が血相を変えて「おい、やばいぞ、リーマンが破綻するぞ、経済はグローバルに繋がっているから日本もあつと言う間におかしくなる」師匠の云ったことが12月頃から影響師匠に相談してもお前の会社だからお前の責任だと全く取り合ってくれない、師匠と松下幸之助さんは共通するものがあつた、社員の首は切らない・全員に営業に出してもらう＝私はこれでいけばいいんだ！先ず経費の洗い直し最初に自分の報酬は半分に社員給与は泣く泣く3%づつカットを一人ずつ呼んで営業のお願いし全員営業マン

* 経営者にはピンチはつきもの～社員全員月60件訪問を目標にメールや電話でアポ、成果はなかなか上がらず私は焦りに焦つた、しかし社員はとことんやりぬき半年たった頃からポンポンと大きな仕事をとることが出来るようになってきた。技術者だって事務職だってその気になれば凄い潜在能力だ。しかし取れた仕事は直ぐ終わってしまい社内にあーあーやっぱ駄目かという空気が漂つた。社長の出番と会議で「大手の企業が何故うちに任せてくれたか、分かる？皆キョトン！能力があつてコストも安いからうちを使ってくれたの！過去のしがらみや既得権に関係なくここから皆がヨーイドン、ピンチはチャンスよ」営業と技術のスペシャリストを数名採用し営業力を強化した。売り上げは急回復、利益を社員に還元する仕組みを整え、士気は益々高まつた。

2011年売り上げは計画通り3月期末目前の11日都内は激しい揺れに襲われた。私は直ぐにおなじみの飲食店に連絡しおにぎりを注文更にありつたけの水とカップラーメンを買ってこさせた、幹部達は社員の安否確認をした、よし全員無事だ。取引先の状況を黒板に書きだしていった。福島県いわき市に8人派遣していたが全員呼び戻した。ピンチが訪れた時、会社を救うのが社長の務めだ。人を育てることが・ぶれない事。

* 難しく考えない経営をしよう～電機メーカーなど大口の会社が中国の会社に検証の仕事を出している、社員から中国へ進出しなければとの指摘があつたが日本ならではの木目細かなサービス、品質への高い意識を日本で継承しなくてどうするとの思いがつのっている時、岩手県の滝沢市から「わが市に来てください、

女性にITの職場を提供していただけませんか優秀な女性が力を発揮できず埋もれています」2013年滝沢ソフトウェア検証センターを開設、今40人の内8割が女性だ。

- *ある大手の監査法人に招かれ400人位の聴衆の前で何人かの女性起業家が登壇、私はこう切り出した「この中で学歴が最低なのは、私です」会場は大爆笑、つかみはOK、飾らず、思いのたけを話し、大受けだった、多くの人と知り合いになれた。

(長いエピローグ、親友「A」と、先生達のこと)

- *荒川の土手は3年B組金八先生こと武田鉄矢さんがこの土手を歩いているが、私は子供の頃過ごして不良の限りを尽くして会社設立の頃から、この土手には近づかなかった、だが2015年8月突然訪れた、中学時代の悪親友Aの死だった。39歳で死ぬなんて、私は葬儀の仕切り役を買って出て、あの頃、大迷惑をかけた先生達にも連絡懐かしい顔が集まったが私は申し訳なくてまともに顔を見られなかった。久保田お前何している？そう聞かれても会社を経営しているとは言えなかったインターネットで検索した先生たちは驚いた。会社のホームページもあるし、商工会議所から表彰されたこともある、でも先生たちは半信半疑だった。翌月の命日にもう一度集まり学年主任の先生はしみじみと見つめて「こんなに立派になって、貴方は私の誇りよ」そして、一番謝らなければならないのは給食にトイレの水を入れて虐め、学校を辞めさせてしまったあの若い英語の先生だ、先生は笑っていた、私が未熟過ぎたの、学校を辞めたのは自分を鍛え直す為だったの、教員試験を受け直して今は中学の先生、私が卒業式の時にあげたティーカップは今も大切に持っている、別れる時に先生は私の手をギュッと握り「貴方は私の誇り尊敬できる女性になってくれてうれしい、でも約束して、体を大切にすると無茶し過ぎないって」私は涙を流しウンと云っただけ
- *父の事～私の父はインターネットで私の名前を見つけたが連絡しようとしなかった、見かねた叔父がマキちゃん兄貴に会う気はないかと電話がかかった。その年、お盆に、北海道で再会、家に行き驚いた、私の写真が沢山貼ってあった、不覚にも熱いものがこみ上げてきた。父の家で食べきれない程田舎料理をごちそうになった。帰り際、父は私の手を取り泣きそうな顔で「頑張れ、これからも応援しているぞ、身体に気をつけてな！」父はこんなにも愛してくれている、それが親というものか。

(おわりに)

私には会社が子供であり家族だ、我が子を産まなかった代りに社員達と一緒に成長している、経営者として一人立ちして社会の役に立ちたいと強烈に思うようになった。私には夢がある「日本の未来を支える子供達や親御さん達に、私の経験を語って生きるパワーを届ける事だ、日本の素晴らしい伝統や美徳を復活させ活力ある日本を再生すること、それが日本で商売する経営者の使命だと思うようになった」今生は一度きり。人生の最後の一瞬迄、自分らしく思い切り生き抜きたい。 (完)

